



Title	Breaking the "Bourne" : Literary Development and Achievement of Jane Austen, Charlotte Brontë, and George Eliot
Author(s)	馬渥, 恵里
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57893
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【27】

氏名	馬渕 恵里
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第23481号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	Breaking the "Bourne": Literary Development and Achievement of Jane Austen, Charlotte Brontë, and George Eliot (「限界」の彼方へ—ジェイン・オースティン、シャーロット・ブロンテ、ジョージ・エリオットの挑戦)
論文審査委員	(主査) 教授 玉井 瞳 (副査) 教授 森岡 裕一 教授 服部 典之 准教授 片渕 悅久 准教授 石割 隆喜

論文内容の要旨

本論文は、イギリスの19世紀初頭から後期にかけて活躍したイギリス小説界を代表する3人の女性作家、ジェイン・オースティン(1775-1817)、シャーロット・ブロ

ンテ(1816-55)、ジョージ・エリオット(1819-80)を取り上げ、彼女らの創作活動において「限界・制限」となっていた文学的制約を克服して新しい文学の地平を切り拓いたことを、その代表的小説の読解を通して解き明かした研究である。論文は、序論、本論3章、結論、および注・参考文献から構成されており、論全体で英文で159ページ、和文400字詰め原稿用紙に換算して約550枚に相当する論文である。

「序論」では、3人の小説家それぞれにとっての「限界」をあらかじめ簡潔にスケッチする。オースティンにとって18世紀小説に見られた書簡体小説が、ブロンテにとっては自伝的小説の形式が、エリオットにとっては3人称小説という物語構造と女性主人公の成長というテーマとの関わりが、それぞれ挑戦すべき「限界」であったことを指摘し、3人の作家がこれらの「限界」にいかに取り組み克服したかを明らかにするのが本論の目的であると述べる。

第1章「ジェイン・オースティンと手紙」では、オースティン小説に登場する手紙の機能に注目し、18世紀書簡体小説との接点を検証することにより、小説空間のなかで果たす手紙の機能の変化とその意味を考察する。『高慢と偏見』では、女性主人公が恋人からの手紙を読むという行為を経ることで大きな人間的成长を遂げるありようを細密に追跡し、手紙の機能が「書くもの」から「読むもの」へと変容を遂げるという特質を指摘する。オースティンの他の小説(『マンスフィールド・パーク』、『エマ』、『説得』)においても手紙が主人公たちの成長に深く関わり、また社会への関心のつなぎをみずから獲得する過程にも関与していることを検証し、後輩のイギリス女性小説家たちのテーマにつながる側面を明らかにする。

第2章「シャーロット・ブロンテと自伝」では、女性主人公の半生を描いた2つの小説、『ジェイン・エア』と『ヴィレット』を取り上げ、その各作品において「自伝」の文学的慣習を逸脱する要素を導入している特質を指摘し、その意味を考察する。『ジェイン・エア』では、ジェインの自伝でありながら、ジェインに求婚をしたことがあるセント・ジョンが『ヨハネの黙示録』を踏まえた言葉でもって幕を閉じる構造になっている意味を問い、自伝の書き手ジェインが描くことのできないみずから死という未来のヴィジョンを包摂する叙述が実行されている事実を指摘する。このような物語構造をもつ小説を、過去の記録を記すという自伝の「限界」を超えた新しい自伝のかたちとして評価する。

ブロンテのもう一つの自伝的構造の小説『ヴィレット』については、女主人公が自分自身の人生について語る叙述と他人の人生について語る叙述との二つの語りが並存している点をこの小説の特質として指摘する。そして、この他者ないしは異質なる存在の視点を前景化する叙述を取り込んだ自伝の物語構造と女性主人公の人間的成长を追う叙述とが有機的に結びついていることを、論者は強調する。

第3章「ジョージ・エリオットと女性の社会生活」では、エリオットの女性主人公たちの成長は多面的な社会を内在化する過程のなかで実現されることを、『フロス河畔の水車場』と『ミドルマーチ』の2小説の読解を通して解き明かす。前者の女性主人公マギーの自己実現の表象には、小説空間に描かれる洪水の場面が大きな意味をもつことを指摘し、この場面において、主人公を悩ましていた内なる自己と外なる社会との間に横たわっていた「限界」が崩壊する契機が描かれていると主張する。

『ミドルマーチ』については、自己と社会との対立に直面した女性主人公ドロシアについては、両者の間を分ける「限界」を乗り越えた先に、社会と敵対する自己を形成するのではなく、社会と自己との融和的関係を実現するかたちで自己実現を図る叙述に、この小説の特質の所在を指摘する。そのうえで、主人公の精神的成长を描く女性版教養小説としては新しい可能性に挑戦した作品として、『ミドルマーチ』を評価する視角を提示する。

結論では、3人の女性小説家がみずから「限界」に挑戦したとき、その視線の先には

必ず「他者」や「社会」が共通の問題として存在していたと述べて、本論を終えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリスの19世紀小説界を代表する3人の女性小説家、ジェイン・オースティン、シャーロット・ブロンテ、ジョージ・エリオットを取り上げ、彼女らの創作活動において「限界・制限」となって横たわっていた文学上の制約や文化的・社会的事情を克服することにより新しい独自の文学世界を確立した過程を跡づけた研究である。オースティンの『高慢と偏見』、『マンスフィールド・パーク』、ブロンテの『ジェイン・エア』、エリオットの『ミドルマーチ』などのイギリス文学の正典（カノン）を形成する代表的小説作品群に対して、女性主人公の精神的成长とその小説形式との関わりに焦点を絞り、一つのパースペクティヴからテクストの綿密な読解を実行し、女性作家小説の発展と変容を推進した根源的条件・根拠を解明しようとした意欲的な試みは高く評価されねばならない。オースティン小説における「手紙」の機能、ブロンテ小説における「自伝形式」の意味、エリオット小説における「社会」を描出するための小説構造の構築が、女性主人公の成長というテーマの表象にいかに密接に関わっているかが鮮やかに解き明かされている。この研究により、オースティンからブロンテを経てエリオットへと至る小説史の展開において、女性主人公の型とその人生のありようが共通性と差異性との両面から明確に把握できたのは、イギリス小説研究にとって大きな貢献であると言えよう。

ただし、本論文において問題がないわけではない。論者の提起する「限界」が、文学的慣習から社会的制約まで広範囲に及ぶためその輪郭がやや不鮮明になるのが惜しまれる。特にエリオット小説における「限界」についての論述にはより一層の工夫が求められよう。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものでは決してない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。